

八戸での4年間 結実

高橋(八学大) G1位

遅咲きエース 喜色満面

遅咲きのエースに吉報。八戸学院大の高橋優貴投手(21)が25日のプロ野球新人選手選択会議(ドラフト会議)で、巨人から1位指名を受けた。諦め切れなかった夢をかなえるため、新天地・八戸で野球漬けの日々を送り、奪った三振の数だけ夢の実現に近づいてみせた。「4年間やってきたことは間違っていないかった」。満面の笑顔で喜んだ。



夢をかなえ、八戸学院大硬式野球部の仲間に見せて笑顔を見せる高橋優貴投手(中央)＝25日、同大

茨城県ひたちなか市出身。小学3年で野球を始めた。東京の東海大菅生高に進学し、背番号11を背負って挑んだ高校最後の夏は、西東京大会決勝で敗れ、甲子園の土を踏めなかった。野球を始めた頃から抱いていた「プロ野球選手」の夢。しかし、中学、高校と進むにつれて遠ざかっていくように思えた。「自分に実力がない」と感じたからだ。

そんな時、高校の監督から勧められたのが八戸学院大への進学。「4年間野球をするなら、厳しい環境に身を置きたい」。投手出身の正村公弘監督(55)の指導を受けながら、プロを目指す道を選んだ。

最速152kmの直球が武器。正村監督も「力強いボールを投げる」というのが第一印象だった。ただ、試合を重ねるうちに「弱さ」が現れてきた。こその場面で浮き球を打たれて、逆転負けを喫する試合も。それでも「試合をするたびに出了課題を一つずつつぶしていった」(高橋投手)。

どんな練習にも、誰よりも真剣に、真面目に取り組んだ。自然とエースの風格も出始め、「打たれても、冷静にマウンドに立てるようになった」と正村監督。精神面の成長は、指揮官も目を見張るものがあった。

技術面では今秋、大きな変化があった。持ち味のストリートに加え、スクリーンボールを実戦で使えるようになり、投球の幅が広がった。北東北大学野球リーグ最終戦では通算301個の奪三振を達成し、多和田真三郎投手(現西武)が樹立した記録299個を塗り替えた。「4年間、けがなくマウンドに上がり続けた成果」。成長の証しを目に見える形で残すことができ

た。

中学、高校時代はエースではなかった。それでも「プロになりたい」という夢だけはいつまでも消えることがなかった。「自分は何でもない選手だったが、いろいろな経験をここまですて来た」

監督仕込みの投球術はもちろん、ボールを握った時、腕を振った回数、勝利の喜び、敗れた悔しさ…。八戸での4年間の経験を糧にして、プロの世界に飛び込むつもりだ。(金濱千優希)